



御簾ごしの姫

甲姫 作

（春）

——黎明の刻。

両腕に瑞々しい花束を抱えて、ぼくは中庭の縁側から、姫さまの屋敷に上がった。その一室はとつともなく広い。奥まった空間は障子で区切られていて、信頼された女房だけが出入りできる。

ぼくは半開きの障子の前で跪いて謁見の許しを請うた。許す、と御簾越しにうら若い女性が応じる。

「姫さま。本日の花をお持ちしました」

「近う寄れ」

音楽的で滑らかな声が呼ばれる。ぼくは深く頭を垂れたまま、膝だけ動かしてサササツと前へ進んだ。そして手に持った花束を、高く掲げた。

朝に一度、夜に一度。この屋敷の主たる姫宮に花を届ける——それがぼくの仕事だった。

姫さまの女房の一人が内から障子を開いて、御簾を巻き上げてくれる。ほどなくして、手の中の重みが消えた。

1 「良い花じゃ」

「ありがたきしあわせ」

姫さまのお褒めの言葉に、ぼくは更に深く平伏した。きつと愛らしい顔かんばせを笑みの形に綻ばせてくださったのだと、想像しながら。

実際は、ぼくは自分がお仕える姫さまの顔を見たことが無い。姫さまはいつだって御簾越しでしかお会いしてくださらないからだ。ぼくがこの両目に映すことを許されているのは、姫さまの透けるように白い手だけだった。

視界の端で繊手が細い指を動かしした。先端に向けて少し尖っているような長く艶やかな爪に、目を奪われる。

「そなた、最近新しく入った小僧じゃの。名をなんと申す」

「あわゆき。淡い雪と書いて淡雪でございます、姫さま」

ありのままに答えると、姫さまは声をあげてころろと笑った。白い手は一度引っ込むと、今度は扇子を持って再び現れた。

「女子おなごみたいな名じゃな。同じ名の菓子があると聞いて

たことがあるぞ」

扇子が、ぴしりとぼくを指す。男児の身でありながらつまらない名だとおっしゃるのだろうか。ぼくを育ててくれた村長が付けた名なのだからどうしようもない。

「すみません」

「なに、謝ることではあるまい。己の名じゃ、誇るがよい。して、歳はいくつじゃ?」

「十三です」

孔雀模様の扇子が御簾の奥に戻る。姫さまがそれを広げて、口元に当てるのが影のゆらめきでわかった。かと思えば、姫さまは身を乗り出して、御簾に顔を近づけている。

「透き通るような銀色の髪。珍しいのう、美しいのう」

「お褒めにあずかり光栄です」

「ふふ。よう来た、淡雪。そなたの選ぶ花は香りも色合いも多種多様で、飽きが来ない。ここはもうそなたの家も同然じゃ、好きに羽を伸ばすのじゃぞ」

「ありがとうございます。姫さま」

ぼくは心底の感謝を込めて返答する。

村長の元から自立したくて奉公先を探していた矢先に、この屋敷でのおつとめを紹介された。待遇はいいが仕事内容が奇怪だからと、前任の者が辞退したばかりらしい。ぼくはこの機に飛びついた。

花はそれなりに好きだ。朝夕、花を選びすぐって姫宮にお届けするだけのこの仕事は、ぼくの性に合っていた。

* * *

翌週、姫さまはおつとめの時間外にぼくを呼び出した。昼餉と夕餉の中間の時刻だった。

「淡雪なる菓子を取り寄せた。食べよ」

「ありがとうございます」

しゅると、御簾が上がる。床との間にできた隙間から、小皿が押し出された。雪のごとく白い塊が皿の上に並んでいる。

ぼくは一方的にそれを与えられたけれど、決して嫌な気はしなかった。そして何故か味の感想を求められた。あまり言葉を繰るのが得意ではないぼくは「甘い

です」「舌先でとろけます」と安易な感想しか語れなかった。

緊張して、満足に味わえずに急いで食べてしまう。両頬をパンパンに詰め込む。その様子を心配した女房がお茶を持ってきてくれる。ぼくは有難く飲み干した。

「そうです、姫さま。先ほど咲いているのを見かけて、思わず一本手折ってしまいました」

比較的の言って得意分野、花の話題へと方向転換する。ぼくは着物の袖の中をまさぐった。

「なんじゃ？」

「八重桜です」

「桜は嫌いじゃ。早う持ち去れ！」

初めて、姫さまがお怒りになられた。少し上がっていた御簾の端が、騒々しく床に落とされる。

「すみません！」

打たれたように立ち上がり、走り去る。

視界が涙で滲んだ。手元の小枝を見下ろすと、見事な房がぼくを元気付けに見上げているようだった。

ぼくは姫さまのことを何も知らない。まさか桜がお嫌いだったなんて。

お近づきになりたい。考えるだけでおこがましいのだけれど、もっとよく知りたいと願うことだけならば、誰にも咎められないはずだ。

胸が穿たれたように痛んだ。夜こそは、ちゃんと喜んでいただける花を選ばなければ。

（夏）

ぼくがこの山奥の屋敷に来てから季節は巡り、茉莉花が芳香な夏がやってきた。

「姫さま、本日の花をお持ちしました」

「近う寄れ」

今日も姫さまは新鮮な花をご所望だ。いつも花が捨てられるところを見たことが無いから、どこに消えているかはわからない。調べようとしたこともあったが、女房たちが立ちほだかって、難航した。

「そなたはよく飽きもせず毎日毎日、わらわに花を持ってきてくれるものだな」

「おつとめですから」

おかしなことをおっしゃるお人だ。たとえ飽きよう

とも、それが役目である限り、放り出したりはしない。それに、この屋敷は居心地が良いのだ。姫さまのお役に立って、ずっとここに居たい。

「ふふ。最近、そなたが来る時間が一日の楽しみじゃ」「光栄です」

今度はうれしいことをおっしゃられる。楽しみにするほどの何かが、ぼくの来訪にあるとは思えないのに。優しいお言葉をかけられて、ぼくは大胆な気持ちになつていたのかもしれない。頭を下げたまま、思い切つて訊ねたのだつた。

「教えていただきたいことがあります」

「なんじゃ、申してみよ」

御簾越しに彼女が扇子を煽ぐのが見える。僅かばかり、警戒を滲ませた声だった。また拒絶されたらと思うと、恐ろしい。それでもぼくは引き下がらなかつた。

「姫さまはどうして、桜がお嫌いなのですか」

「……季節も移ろつたというのに、そなた、そんなことをまだ気にしておつたのか。あれはそなたの落ち度ではない」

「では教えてくださいますか」

気弱そうな面をしておるのに押しの強いやつじゃの、と姫さまは呆れ笑いを漏らした。お気を悪くした風ではなかつた。肩にかかつた長い髪を手先でいじりながら、姫さまは咳払いをした。

「母上を思い出させるからじゃ。いつも少し赤らんだ頬が愛らしい、桜と並び立つととても絵になるお方じゃつた。『桜の宮』と帝に——父上に、そう呼ばれていた」姫さまが次に語つた内容は、ぼくに衝撃をもたらした。

「母は嫉妬深い女でもあつた。父の他の寵姫に隙あらば嫌がらせをして、独占しようとした。そしてその矛盾先はついにわらわにまで向いた」

——信じられない！　こんな、花にしか興味ないような幼子が！　帝の寵愛をいただくなんて……！

「わらわが十二歳になった頃、父上はわらわにやたらと構うようになった。『遊び』と称して、気色悪いまねまでしてきたな。母はそんなわらわにまで嫉妬した。果ては怨念によって体に異常をきたし、呪詛を吐きながら息を引き取つたという」

姫さまのお声には厭悪えんおが含まれている。それが母に

対してなのか、父に對してなのかはわからない。昔語りは静かに続いた。

——可愛くない子！ 呪ってやる！ お前なんか、一生花でも食べていればいいわ！

「母の怨念を一身に受けて、わらわも異常になってしまった。わらわは花喰いのアヤカシじゃ、淡雪。現帝の皇女でありながら、屋敷から出られず、誰とも会えず、ひそかに朽ち果ててゆくしか許されていない惨めな女なのじゃ」

ぼくは息をのんだ。アヤカシだの呪詛だの、姫さまは、何をおっしゃっているのだろう。

いや。そんなことよりも気色悪いまねって、なんだろう。よく、わからなかった。

姫さまは現在十九歳だと聞いている。七年前の出来事を今なお引きずり、心の傷を癒せずに過ごしておられるのだろうか。

5
あまりの仕打ちではないか。こんな境遇のまま朽ちていようなお方ではないと、ぼくは頑なに信じて疑わない。そう抗議をしたら、姫さまはそっけなく手を振った。

「むだじゃ、むだじゃ。気持ちほうれしいがの。帝のすることに、抗えるはずがあるまいに。衛兵と言えば聞こえはいいが、わらわが逃げぬように監視しておく」
「ではせめてものお慰めに。今晚は口どけの良い、美味なるお花をお持ちします」

ぼくは「花を喰う」という主張を本気で信じたわけではなかった。ここで話を合わせれば、姫さまは氣をよくしてくださるのではないかと考えての提案だ。

「なら、薔薇を探してまいれ。花びらを砂糖に漬けるとうまいのじゃ」

「かしこまりました」

その場を辞して、厨房へ足を運ぶ。

砂糖といえ、町では高額で取引されている貴重品ではないか。祝いの席でなければ目にかかることすらできないのがぼくの認識であった。

けれど姫さまの御為、屋敷の者は喜んで貴重な砂糖を保管庫から出してくれる。ぼくは女房たちに話をつけてから——日が暮れるまでの間に薔薇を手に入れるべく、山に踏み入った。

（秋）

五年の月日が流れてなお、ぼくのつとめは変わらな
い。

壮大な夕焼けを眺めながら金木犀をかき集めた。新
鮮なうちもいいが、乾燥させれば後で茶にできる。

持ち帰った花を整理し、今夜の分を腕に抱えて、参
上した。

「失礼いたします。淡雪です」

秋は夜が肌寒い。それゆえ障子が全て閉じられてい
る。ぼくは軒先の燈籠の下で、応答を待った。

しばらくして女房が開けてくれた。ぼくは縁側から
上がり、灯台の照らす箇所へと歩み寄る。女房は姫さ
まの部屋の障子も少しだけ引いて開けた。

「姫さま、本日の花をお持ちしました」

「近う寄れ」

今宵は一段と声がか細く聴こえた。

時が経つにつれ、姫さまは以前ほど楽しげに語りか
けてくることなくあった。けれども相変わらず、白
い手を御簾から伸ばして、手招きをしてくださる。

月に何度かお加減が悪くなって、会ってくださらな
い時がある。つい先日がそうだったため、まだ調子が
戻らないのだと考えられる。

いつかそういった折に年配の女房にこっそりと打ち
明けられたことがある。どうやら姫さまは本当に花を
食べておられる、らしい。それどころか、他にどんな
食べ物も受け付けないそう。

信じられなかった。食用にも使える花は何種類か存
在するが、それと毎食花を食すのでは大きく話が違
う。

奇怪な事実にも動揺したものの、やがて受け入れて、
何事もなくつとめに徹した。

花を献上した後、沈黙が下りた。ぼくは退室の許可
を請う。すると何故か姫さまが引き留めた。

「奇特なやつじゃ。そなたは声変わりする以前からつ
とめておるな。すっかり図体も大きくなって……こん
なに長くもつとはのう。もう、わらわの実態もわかっ
ていよう」

何とお答えすればいいかわからないので、黙って続
きを待った。いつしか女房の気配はしなくなっている。

「恐ろしくないのか。花しか喰えぬ女など、気味が悪
かろう」

「めっそもありません。ぼくが集めている花が姫さ
まのお食事になるとわかってから、ますますやりがい
を感じております」

「そなたの献身はうれしい。しかしわらわは鬼じゃ、淡
雪」

「おに……？　だとしても姫さまは、姫さまです」

「ちがう！」

彼女は荒々しく御簾を叩いた。かと思えば、勢いに
任せて巻き上げた。

ぼくはつい顔を上げて、呆気にとられる。

姫さまが頭巾か何かを脱ぎ捨てたらしい。視界を覆
う白い布がはらりと落ちた。その向こうから現れた異
様な面貌に、刹那、見惚れる。

すぐに目を逸らした。高貴なる姫の顔をぼく程度の
人間が直視するなど、あつてはならない。

そんなぼくの顎を、しなやかな指が捉える。目線を
強引に誘導された。必死になって目を逸らすも、うま
くないかない。

姫さまは区切られた空間から身を乗り出している。
どきりとした。覗き込む澄んだ黒い双眸に、そして顎
に触れるひんやりとした指に。

「この角と牙を見よ！　心が昂ると、勝手に出てしま
う。醜いじゃろう」

命じられた通りにしながら、ぼくはゆっくりと頭を
振った。悲痛な叫びが胸を突き刺すようだ。

尊大に振舞うが、姫さまは繊細で傷つきやすい。先
に人を突き放すことで身を守っているおつもりなのだ。
長く湾曲した角や牙があろうと——なんとも可憐で、
愛くるしいお方だ。

「母が異国の民に乱暴されたがために、ぼくは生まれ
ました。母が捨てた代わりに村長が拾ってくださいま
したが、結局どこに行っても疎外感がついてまわった。
でもここは違う。ぼくに温かい居場所をくださる姫さ
まは、この世で最も美しく、尊いお方です」

「尊い！？　そなたはまだ知らぬだけじゃ、わらわの
餓えを。花以外にも口にしたいたいものがあるぞ。時々、
人の血肉を喰らいたくなって、たまらぬ。たまらぬの
じゃ！」

「ではどうか喰らってください。姫さまがそれで楽になれるなら、ぼくの血肉など、惜しくはありません」

そつと彼女の手を払い、改めて平身低頭した。

狂おしい静寂があった。生唾を呑みこむ。じきにサラサラの髪がぼくの耳元にかかり、細い手が肩に触れた。

「いいにおいじゃの……日の下を自由に歩き回る、血色の良いもののおいじゃ。そなたはいつも両手いっぱい花を持っているのに、花よりも野原の匂いがするのじゃな」

熱を含んだ囁きがぼくの首筋を掠める——

激痛に襲われ、反射的に瞑目した。すぐにねっとりとした柔らかいものが傷口をなぞる。流れ出すものを、舐めとってくださいたのだろうか。痛みが徐々に麻痺していく。

目を開くと、恍惚とした表情で血を啜る姫さまがすぐそこにいた。ぼくの血液が姫さまの顎をしたたり、単衣ひとえを赤く染めていくさまに、何故だかぞくぞくとした。

突然、姫さまが我に返ったように顔を上げた。青ざめて、ぼくを揺さぶる。

「逝くな淡雪！ わらわを置いて逝くのは許さぬぞ」

大げさだ。安心させたくて、なんとか笑みを作った。

「いいえ、まさか。明日も姫さまに生きる楽しみがありますように……まだ、死ねません」

「……すまなかつた。もうさがれ。手当てはしつかりやるんじゃ……」

「失礼します」

恥じらつて顔を袖で覆い隠す姫さまをもっと目に焼き付けたかったが、大人しく踵を返す。

傷口を手の平で押さえながら、また明日、と去り際にぼくは呟いた。聴こえていたかどうかはわからない。

〈冬〉

雪中花が群れ咲いている場所を見つけ、ぼくは上機嫌だった。小さな白い花びらから氷を払い、そつと何本か手折って籠の中に置く。

姫さまは、水仙は好きだろうか。

まだ日が高いうちにぼくは屋敷への帰路に付いた。すっかり雪も積もってきたため、早めに帰らなければ

遭難しかねないのである。

その晩、常のように花を献上する。姫さまは終始言葉が少なかった。退室の許可を請うと、いつかのよう
に引き留められた。

「秋に……そなたに狼藉を働いたことが、ずっと心に引っかかっておったのじゃ」

彼女はおやおおと話を切り出した。またいつかのよう
に、人払いがされている。

あの晩以来、姫さまがぼくの血肉を口にするとは二度となかった。肩に空いていた四つの穴——上顎と下顎の二組の牙が穿ったところだ——はとつくにふさがっている。

手当てをしてくれた衛兵は同情のまなざしを見せたが、これは証のようなものだとぼくは思っている。姫さまが己のうちの最も深い闇を共有してくださった証明であり、あの夢のようなできごとが現にあったという証拠だ。

「詫びとしてひとつ、そなたの欲しいものをなんでもやろう」

立場を考えればお詫びなんて求めるべきではないの

に、欲しいものをくれるという誘惑に、ぼくは負けてしまった。抑えきれない興奮が、返事の節々ににじみ出るのも仕方がない。

「何でも、でございますか」

「なっ、なんでもじゃ」

一方で御簾の向こうの姫君はひるんだようだった。どんな風に身を竦めたか、どんな表情をしているのか、ぼくは想像した。

たっぷりと思わせぶりな間を置いてから、口を開く。

「では姫さまの御名みなを教えてください」

姫さまは本名を誰にも教えないし、知っているはずの者も胸に秘めたまま語らない。調べるべきではないとも思う。ぼくはその音を最初に姫さまご自身の口から聴きたいと決めていた。

「そんなことでよいのか」

「そんなことが、良いのです」

おかしなやつじゃの、と姫さまは長いため息をついた。

「あけばな。朱色に華やかと書いて朱華、じゃ」

——あけばなさま。

復唱しそうになって、こらえる。心の中で何度も呼んだ。

「教えてくださりありがとうございます。素晴らしい名です。少女の純粹さと人知を超えた美しさを併せ持つ姫さまに、とてもよくお似合いで……あ」

やってしまった。率直な感想に間違いないが、声に出すつもりはなかったのだ。

「そなた、さすがに口を慎め！ だがありがとうございます！ そんなことを言われたのは初めてじゃ！」

「すみません」

「もうよい！ さがれ！」

「失礼します」

姫さまはバシバシと畳を叩いておられる。果たして怒っているのか喜んでいいのか、きつと両方なのだろう。

深夜、その名を指先で冷たい床になぞってみたりした。「華やか」の字は知らなかったので、知っている者に当たるまで屋敷中の奉公人をかたっぱしから捕まえるはめになった。

画数が多くてなかなか憶えられそうにない。

それでも練習をしている間は姫さまを身近に感じられて、幸せだった。

* * *

「姫さま、本日の花をお持ちしました」

「近う寄れ」

翌日になるとぼくは朱色の椿を交えた鮮やかな花束を持って参上した。朝に一度、そして夜に一度。

夜は、いつにも増して退屈そうな姫さまが話しかけてきた。白い手が御簾の下からはみ出ている。他の者の気配は既に無い。

「何か面白い話をせよ。そうじゃ、名と言え、そなたの名の由来はあれじゃろう。淡雪……つまり、春に生まれたとか？」

「拾われたのが、地面が淡く雪に覆われた春先でした。色素の薄い髪と肌が、今にも雪と溶けて消えてしまっそうだったからと、村長がそう名付けてくれました」
「捨て子か……珍しい話でもないが、世知辛いもう。そなたもわらわも、世にはじかれてしまった」

姫さまが悲しそうな声で言う。ぼくは強く否定した。
「いいえ。この屋敷の者は、姫さまを大切に想っております」

「おつとめだからじゃ。みな、腫れ物に触るように遠くから『見守って』おる」

世に絶望したような冷たい物言いに、ぼくはいてもたってもいられなくなった。

「姫さま。御名をお呼びすること、お許しただけですか」

「なんじゃ、急に。許す」

「朱華さま」

他に何を思うより先に、細い手をそっと握った。

雲上のお方に狼藉を働いている自覚はあった。だがそれ以上に、彼女の孤独を溶かしたいという使命感があった。どのような罰を受けようとも、我が心のうちを伝えたい。

「お慕い申し上げます」

平伏したまま、更に告げる。

11
「いつか年老いて腰が折れ曲がり、自分の足で歩けなくなつて花も摘めなくなつても、朱華さまが許す限り

はおそばにおります。ぼくでは何の慰めにもならないかもしれないが……」

やがて、御簾がぎこちなく持ち上がる音がした。顔を上げよ、と小声で命じられる。

濡れそぼった黒い瞳がぼくを見下ろしていた。一、三度瞬いて、ついに涙があふれ出る。

「近う寄れ」

ぼくは緞手に引かれて、初めて彼女の部屋の畳を踏んだ。当惑して、うまく言葉が出てこない。

「あの、姫さま。これは」

姫さまはふくよかな赤い唇に指をあてて、幼児を黙らせるような仕草をする。秘め事の匂いだ。我知らず動悸がした。

「淡雪、ありがとう。そなたの献身、うれしいぞ。そこまで言うなら慰めるがよい。てはじめに、もう一度名を呼んでくれぬかの」

「朱華さま。本当に、よろしいので……?」

妖艶な微笑みが答えだった。

ぱさりと控えめな音を立てて、御簾が下がる。

姫さまの寝床を照らす灯台の炎が穏やかに揺れている

12
た。重なる影が、壁に映し出される。

こうして彼女を閉じ込めるための空間は、はじかれた者同士の安息の所と変わった。

それからというもの——夜な夜な、美しい手は御簾の中までぼくを招き入れるようになった。